



2011

# 東日本大震災

一月下旬、被災者の心の支援に取り組む東日本大震災圏域創生NPOセンター(宮城県石巻市)の太田美智子さん(左)がそば打ちの会を開くと聞き、再び訪ねた。親子連れの参加者はそれぞれに傷を抱えていた。

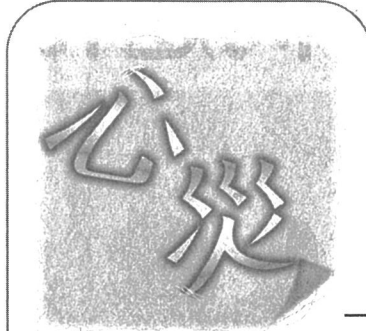
第二人と母親(四)とともに参加した中学一年の長男(三)は震災時、小学四年生。津波から逃れるため学校に避難してきた人たちの中に祖父母もいた。だが、祖父だけが知らない間に自宅に戻ってしまった。

祖父の遺体は三カ月後に見つかった。「さつきまで隣にいたおじいさんがいなくなった」ということの衝撃は大きかったと思う」と母は案じる。長男は震災以来、当時の話を一切しない。

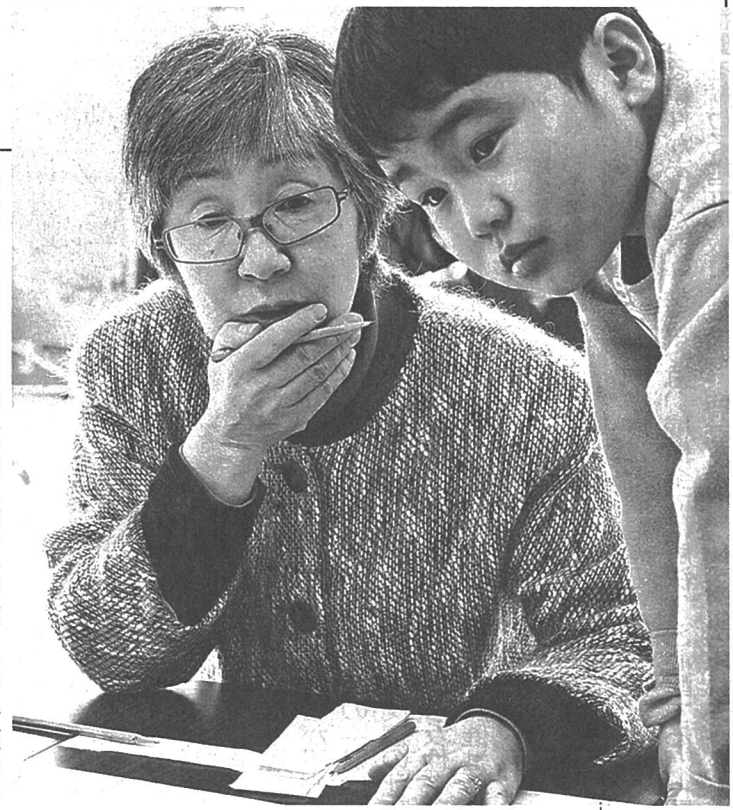
母親自身も昨年(二)から、うつ状態になった。十八年勤めた職場を解雇された。「ぼーっとして使えないものにならなかったのかな」。昼間も眠くて仕方がない。片付けようと思っ

も体が言うことをきかない。夫に受診をすすめるれ、抗うつ剤を飲むようになった。

震災直後、自宅周辺は壊滅状態と聞き、子どもたちの無事が分かるまで生きた心地がしなかった。一年がたったころ、近所だった女性(三)が自殺した。経験のない強い衝撃に何度も襲われた。一息も私も、心の傷は一生抱えていくのかも。それでももうわべの環境だけでもいい。早く落ち着いた生活を取り戻したい」



## 4 次世代へ



子どもたちと、今後の生活について話し合った太田美智子さん(左)と宮城県石巻市で

次的なストレスが増える時期」と指摘する。

子育て中の保護者の電話相談に応じる東北大「震災子ども支援室」相談員の平井美弥さん(四)は「子どもはそばにいる大人が倒れないよう、支えたい」と話す。だが震災直後、全国に三十近くあった震災に特化した電話相談窓口は今、三分の一になっている。

大人たちの模索が続く中、三年の年月は、子どもの心を強くもしている。

母と兄を亡くした男子中学生は、背も兄より高くなって、最近「超えたな」とつぶやいたのを父は聞いた。苦しみの中でも、伸びたい、生きたい、という心の声がかんてくるようだと感じた。

「あるがままを認め、今の緊張状態を一度解きほぐすことで、次への意欲を湧かせることができたら」と太田さん。四月には、太田さんたちが震災後に交流するスペインの支援者を、男子中学生らとともに訪ねる予定だ。

「おわり」(この企画は、小林由比が担当しました)

# 模索 傷抱え生きる